

『認知症はいかい高齢者 検索・声かけ模擬訓練』

～老健から発信、誰もが自分らしく安心して暮らせるまちづくり～

名古屋市
みなと医療生活協同組合
介護老人保健施設あつたの森
副施設長補佐 齊田浩一

【背景】

認知症による「はいかい（徘徊）」などを理由に、全国で行方不明になった人の数は、1年間におよそ12,000人にのぼります。そのうち、死亡したり行方不明のままだったりする人は、合わせて550人を超えていると言われています。

全国では、多くの自治体や行政機関を中心に、はいかい（徘徊）等によって行方不明になった高齢者のための検索訓練が実施されたり、ネットワーク化を図る取り組みが進められています。

名古屋市においても、「はいかい高齢者おかえり支援事業」として、認知症の方のはいかい（徘徊）による事故を防止するため、地域住民の協力を得て、はいかい（徘徊）されている方を早期に発見する取り組みが行われています。

2015年1月に公表された新オレンジプランでは、基本的な考え方として「認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で、自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す」とあります。「認知症があっても、尊厳をもって最後まで自分らしくありたい。」そんな誰もが望む思いを実現するためには、地域の支えあいが必要です。

いわゆる団塊の世代が後期高齢者となる2025年に向けて進められている「地域包括ケアシステム」の構築においては、自助・互助といった、セルフケアや住民組織の活動が大切だと言われています。

介護老人保健施設（老健）には、市町村自治体や各種事業者、保健・医療・福祉機関などと連携し、地域と一体となったケアを積極的に担う役割があります。高齢になっても認知症になっても、誰もが自分らしく安心して暮らし続けることができる地域づくりに向けて、当施設で取り組んでいる「認知症はいかい高齢者 検索・声かけ模擬訓練」についてご紹介します。

【対象・方法】

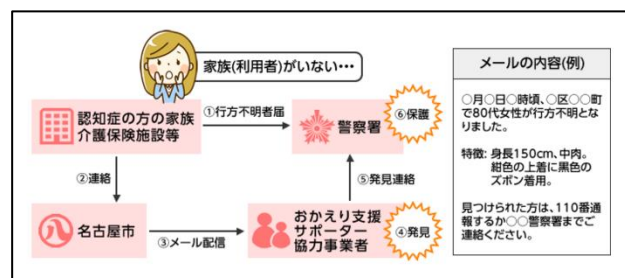
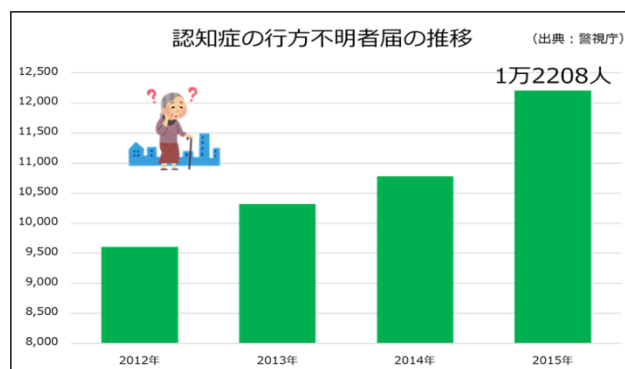
1. 企画名

認知症はいかい高齢者 検索・声かけ模擬訓練

2. 開催日時

第1回：2015年11月21日（土） 13時30分～16時30分

第2回：2016年3月6日（日） 13時00分～15時30分



名古屋市 はいかい高齢者おかえり支援事業

3. 訓練の内容

第1部：認知症講座、デモンストレーション

第2部：模擬訓練

第3部：振り返り・意見交換会

4. 訓練会場

当施設を中心とした、
東西 800m、南北 700m の地域

5. 訓練の目的

- 1) 認知症高齢者の気持ちに配慮した声かけや見守りの方法と捜索方法を学ぶ。
- 2) 認知症になっても、安心して暮らせるまちづくりの大切さを学ぶ。
- 3) はいかい（徘徊）が「NO」ではなく、安心してはいかい（徘徊）できるまちづくりを進める。
- 4) 世代間交流、多職種協働、地域協働のまちづくりを進める。
- 5) いざという時のために、実効力の高いネットワークづくりを進める。

6. 方 法

- 1) 認知症高齢者役の5人の職員が、訓練会場となる地域をはいかい（徘徊）する。
- 2) 参加者は、捜索依頼情報をもとに、認知症高齢者役の職員を探し声をかける。
- 3) 認知症高齢者役の職員を発見したら、訓練事務局に電話連絡をする。



訓練会場

【結果】

1. 事前準備

事前に、自治体の関係部署や地域包括支援センター、警察署、消防署等に連絡し協力を依頼しました。また、当該地域の民生委員や町内会長、老人クラブ会長宅を訪問したり、地域の会議やサロン等に出向いて、訓練の案内や参加協力を依頼しました。その他、当施設が所属する法人が発行する情報誌への掲載や当法人の病院外来患者を対象にした広報活動を実施しました。

2. 開催日当日

1) 第1部

訓練を開始する前に、認知症専門医による認知症講座を開催しました。また、認知症等でははいかい（徘徊）する高齢者を見つけた際の、声のかけ方やその後の対応についてデモンストレーションを実施しました。

2) 第2部

訓練に要した職員は20人でした。その内、認知症高齢者役は5人です。認知症高齢者役は、あらかじめ設定されたモデルになりきり、決められた範囲内をはいかい（徘徊）しました。認知症高齢者役には1名の観察者が同行し、参加者とのやり取りを数メートル離れた場所から観察しました。訓練への参加者は、地域住民や介護学生、法人内の職員等で、第1回が36人、第2回が24人でした。参加者は、2人または3人の複数名で行動しました。捜索依頼情報をもとに捜索し、声をかけたり関係機関に電話連絡をする等の訓練をおこないました。



3) 第 3 部

訓練終了後に、振り返りと意見交換会を開催しました。参加者からは、「捜索中の高齢者らしき人を発見しても、本当にその人なのかどうか不安になり、声をかけづらかった。」「『こんにちは。』と声をかける事はできて、相手が困っている事や名前、住所など、会話を展開させていく事が難しかった。」「消防訓練のように、定期的に繰り返し訓練する事が大切だと思った。」等の意見や感想がでました。



認知症高齢者役の職員からは、「心配そうにやさしく声をかけてもらえると、とてもうれしかった。」「数人で囲まれて話しかけられると、威圧感があり怖かった。」等の意見や感想がでました。

【考察・結論】

訓練中の事故や傷病等が発生した時の対策として、事前に警察署や消防署に連絡をし協力を依頼しておくことは、リスク管理上必要な事だと考えます。訓練の必要性を地域住民に理解してもらい、地域のネットワークを強化する為には、地域包括支援センターや自治体、民生委員、町内会等の関係機関との連携がかかせません。今後は、関係機関との連携を深め、協力体制を強化したうえで訓練が開催できればと考えます。

当日、訓練を開始する前に、認知症講座を開催したり、声のかけ方や発見時の対応方法についてデモンストレーションを実施した事で、参加者の訓練に対するイメージ化が図られ、抵抗なく訓練に参加できたと考えます。しかし、実際に声をかける場面では、会話を展開させていく事に困難さを感じる参加者が多くいました。参加者の多くは、声をかける事の難しさを感じると共に、繰り返し訓練を重ね、いざという時の対応力を身につける事の必要性を理解できました。また、認知症高齢者役の職員は、はいかい（徘徊）する高齢者の気持ちや、見知らぬ人に声をかけられた時の気持ちについて、実体験をとおして理解することができました。参加者と認知症高齢者役の体験は、振り返り・意見交換会をとおして学びを共有し深める事ができました。

実際に地域に出向き、認知症高齢者役の職員に声をかける今回の様な訓練は、講義形式では体験できない、実践・参加型の講座として実行力のあるものと考えます。

老健は、利用者の在宅復帰及び在宅療養支援の地域の拠点となる高齢者施設として位置付けられています。これは、施設利用者のみならず地域住民をも対象にした、地域に根差した施設であることが求められています。今後も自治体や行政機関、地域との連携を強化しつつ、地域に根差した高齢者施設として、地域住民がともに支え支え合い、誰もが安心して暮らし続ける事のできる地域をつくっていきたいと考えます。